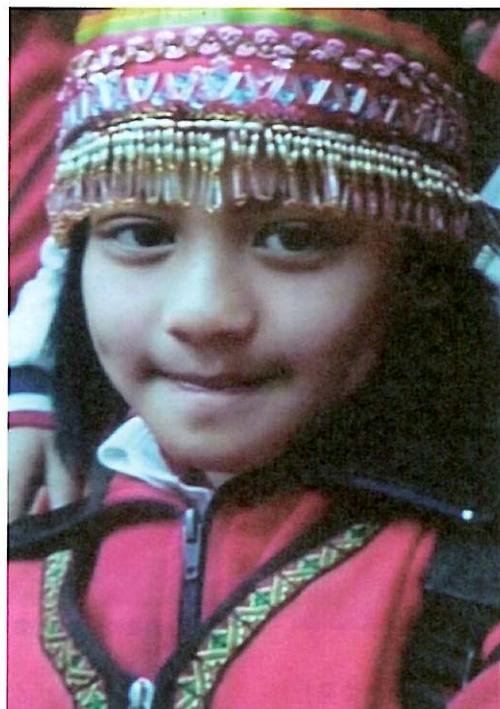


# 室報



邹族（台中国立自然科学博物館のパネル）

## ◀目次▶

台湾での歴史教科書に関する調査	2	新研究員紹介	7
複合民族社会ハワイの光と影	5	2009年度人権問題研究室公開講座	8

# 台湾での歴史教科書に関する調査

宇佐美 幸彦

2008年12月21日から調査のため台湾を訪問した。権力者の立場ではなく、民衆の立場から台湾史を見直そうと思い、特に重要だと考えた点は、(1)台湾と中国本土との歴史的な関係、(2)日本統治時代の台湾民衆の状況、(3)少数民族である先住民がどのように扱われているか、の3点である。これら問題が実際の社会の中でどのように受け止められているのか、台湾の教科書にどのように叙述されているかを調べることが、調査の主要な目的であった。

今回の調査では、協定校である台湾・静宜大学の曾煥棋先生にたいへんお世話になった。曾先生から、台北の「国立編譯館」が台湾の教科書のセンターであると教わり、まずここを訪ねてみることにした。入口で身分証明書を提示すると、受付の人が4階の図書館に資料があるので、そこへ行くようにと指示してくれた。図書館は特



台北国立編譯館

に大きなスペースではなかったが、台湾で発行された教科書は教科ごとそして年代順に整理されていた。歴史教科書のコーナーへ行き、第二次世界大戦後早い時期の教科書と、最近の教科書を手に取り比較してみた。コピー機や複写用撮影台も備えられており、必要な部分を自由にコピーすることができた。私以外の利用者は学生風の若い男性が1名いるだけで、図書館の係員2名は、暇があったのか、ほとんど私にかかりきりで親切にサービスしてくれた。

1954(民国43)年発行の高級中学校教科書「高中歴史」(台湾省政府教育厅発行)に、蒋介石時

代の特徴的な傾向を見ることができる。蔣政権の歴史的経緯からして当然のことであるが、この教科書では、台湾独自の歴史についてほとんど記述がない。ここで取り上げられるのは、「中華民国」の歴史であり、したがって歴代の中国王朝に関する説明が続き、三民主義に基づく中華民国の建国が強調されている。台湾で日本政府が弾圧政策をとったことについてはあまり記述されておらず、むしろ満州(九一八)事変や南京大虐殺など大陸内の出来事が大きく取り上げられている。

これに比べると現在発行されている教科書は大きく変わっている。2006—2007年の龍騰文化事業公司発行の教科書は『歴史1』と『歴史2』に分かれ、前者では台湾の歴史を、後者では中国全土の歴史を扱っている。



現在の台湾教科書「歴史1」(日本の植民地支配)



現在の台湾教科書「歴史2」(南京虐殺などの記述)

前者では、例えば「霧社事件」のような日治時代の先住民の反乱事件、蒋介石時代初期の「二二八」事件など、住民と支配権力との対決事件も取り上げられている。後者は、中華人民共和国についての記述も多く、毛沢東や鄧小平、『人民日报』の記事の紹介などにかなりのページを割いている。中国共産党の政策に対して批判的な記述も多いが、改革開放政策は写真入りで好意的に描いている。当然検定はあるとしても、教科書が民間の出版社から発行されていることも含めて、蒋介石時代にはとても考えられなかったことである。

台北滞在の後、静宜大学のある台中へ移動した。台中駅の近くに台中（中山）公園がある。日本統治時代の1908年に台湾縦貫鉄道が完成し、そ



旧台中神社鳥居

の記念行事のための休憩所として建てられた湖心亭という館が池に浮かび、保育園の子供たちが集団で散歩に来ているのんびりとした公園である。しかしここにも反日の記念碑は明確に示されている。駅の方の入り口から入り、右手の道を進むと、倒れて地面に「展示」されている鳥居が目に入る。日治時代にここに日本式の神社（台中神社）が築かれ、台湾の人々に神道が強制されたが、「光復」後、神社は撤去され、鳥居は倒されたままとなった。宗教面までにおよぶ外国支配の強制という過去の状況が再び起らないようにという警告のためであろう、鳥居の残骸が倒れたままの記念碑とされている。そして公園の西北にある小高い丘（砲台山）の上には「抗日戦士の記念碑」が木の陰に立っていた。

台中市は台湾中央部の山岳地帯に近く、高地に住む少数民族との関係が密接な場所である。少数民族



台中公園抗日記念碑

族に関する博物館などの展示は、台北の歴史博物館にもあるが、台中の国立自然科学博物館にかなり充実したコーナーがあった。少数民族各部族の解説のパネルや山岳地帯の住居の模型の他、大型プロジェクターによる紹介があり、実物大の建物では中に入って生活の様子を実感することもできる。

台湾中部の埔里の近くに少数民族の「九族文化村」があり、台中駅からバスが出ているということなので一日がかりで行くことにした。九族とは排湾(Paiwan)、阿美(Amis)、達悟(Tau)、魯凱(Rukai)、卑南(Puyuma)、布農(Bunun)、邵・



台中自然科学博物館



九族文化村(実物大人形による先住民の生活の展示)

鄒(Thau, Tsou)、泰雅(Atayal)、賽夏(Saisiat)という先住民である。バスは一日に数本で、限られているので、乗り遅れたり、満員で乗れなくなると困るので、早くから待っていたが、出発時刻になんでも誰も乗ってこない。やっと発車間際に一人の女性が乗ってきただけで、50人乗りほどの大型バスはガラガラで台中駅近くの乗り場を発車した。途中市内を回り4・5名の客が増えたが、これでは目的地は閑古鳥が鳴いていると想像せざるを得なかった。バスは平野部を離れて、曲がりくねった山道を登っていく。旧式のバスなので、ガラス窓はガタガタ鳴り通しで、でこぼこ道では体が浮き上がるほど揺れる。1時間半ほどの道のりを走り、やっと目的地に着いた。しかしかなりの山道を走って交通の不便なところのはずなのに、駐車場はいっぱいです、自家用車や大型の貸し切りバスが數え切れないほど止まっていた。中に入ると、バス内での予想に反して、まるで大都市の雑踏にいるような賑わいである。小学校高学年ぐらいの学童があちこちに揃いの体操服を着て大勢いた。年末のこの時期が、遠足のシーズンのようである。「九族文化村」は一種のテーマパークで、山の中の広大な敷地の上方には各先住民部族の住居と演技場が設けられ、下のほうにはジェットコースターや急流下りなどの乗り物がたくさん設置されている遊園地があった。ショーの時間には舞台を取り囲んで、屋外円形劇場風の観客席があり、2・3千人ほどの席は子供たちでぎっしり詰まっていた。ショーでは各部族の伝統的な歌や踊りが披露され、池をロープで飛び越えるパフォーマンスでは、飛び入りで引率の先生たちが参加し、中には池に落ちてしまう先生もいて、生徒たちは大歓声を上げていた。九族広場とい

祭典会場では宗教的な儀式が踊りや歌、見物客の参加とともに執り行われていた。

しかしこの楽しい踊りや乗り物での子供たちの歓声が響く「九族文化村」の近くで、「霧社事件」が起こったことを、ここにいる大勢の訪問者のうちどれだけの人が知っているのだろう。1930年10月27日、泰雅族が武装して、運動会をしていた霧社の公学校などを襲撃し、134名の日本人が惨殺された。日本総督府はこれに対する報復として、重装備の警官・軍隊を動員、飛行機から焼夷弾、毒ガスを投下、さらに先住民の一部を手なづけ、賞金を出して首狩りを奨励し、反乱部族を鎮圧した。霧社の泰雅族1400人のうち、生き残ったのはわずか230名だといわれる（霧社事件については、林えいだい編『写真記録・台湾植民地統治史』などに詳しい）。これは台湾の少数民族を「蕃人」として動物のように扱い、高压的な態度をとった日本政府による警察管理の植民地政策が最大の原因であった。もともと先住民の土地であったところへ「開発」と称して侵入し、電流を流した鉄条網で囲い込み、道路工事や学校建設などの労働に従事させ、しかも賃金不払いをするなどの日本側の強硬な植民地政策に、先住民たちが激怒したのは当然のことである。この事件から日本の植民地政策が住民の人権を全く考えていないことが分かる。およそ法治国家の政府として、統治している国内で犯罪が起こったときに、犯人を逮捕するのではなく、裁判にもかけず、相手を大量に殺してしまうことなど考えられるであろうか。先住民を差別的に「蕃人」(のちに「高砂族」となった)と呼ぶこと自体が問題であるが、彼らに対する日本の「理蕃政策」は徹底した討伐(ジェノサイド)が基本であったことが判明する。

前述のように、この「霧社事件」や蒋介石時代の「二二八事件」については最近の台湾の教科書では取り上げられるようになってきている。しかし1920年代の台湾における社会主義的運動(「無産者新聞」の発行、文化協会、台湾共産党の活動)、蒋介石時代の言論弾圧など、これまで民衆の運動がいかに間に葬られてきたかについて、「言論の自由」、「思想の自由」、「人権」という観点から歴史を見直し、教科書にもさらに大きく反映していく必要があるのではないかうか。

(文学部教授)

# 複合民族社会ハワイの光と影

宮本 要太郎

昨年度、私は関西大学在外研究員制度の恩恵を受け、ロンドン大学で約4ヶ月間、続いてハワイ大学で8ヶ月間、研究する機会を得た。ここでは、特にハワイで感じたことを報告したい。

私にとってハワイは二度目だが、今回、改めて日系人が多いことを実感した。日本から直接行ったわけではなく、しばらくロンドンで過ごしてからハワイ入りしたので余計そう感じたのかもしれない。特にワイキキに行くと、多くの日本人観光客が滞在しているので、まるで沖縄のリゾートにでも来ているかのような錯覚に襲われる。もちろん、日本だけではなく、アメリカ本土を含め、世界中から年間700万人の人びとが観光に訪れる地、それがハワイである。

何がこれほど多くの人びとをハワイに惹きつけるのだろうか？ひとことで言えば、それは、青い空と海、そして恵まれた自然に象徴される「トロピカル・パラダイス」のイメージであろう。確かにハワイの自然は美しく、魅力的である。また、「アロハ・スピリット」という言葉に凝縮されるハワイの人びとのホスピタリティも、確実にハワイの人気を押し上げる要因のひとつである。

こうしたハワイのイメージを光の側面とすると、ハワイには暗い影の部分も存在する。そのひとつは、貧富の差が大きいことだろう。ホノルルのワイキキビーチからダイヤモンドヘッドをはさんで東側のカハラ地区は豪邸が立ち並ぶことで有名だ。もちろん、ハワイには他にも各地に高級リゾートが点在する。他方、たとえばオアフ島の西海岸にあるワイアナエ地区は、海岸のテントや車で暮らすホームレスが多く、非常に治安の悪いところとされている。

しかも、この貧富の格差は明確に人種の違いと対応している。この両方の地区をドライブする機会があったが、カハラでは主に白人、次いで中国系や日系など東アジア系が目立つのに対し、ワイアナエで見かけるのは、もっぱらポリネシア系ハワイアンの人びとであった。実際、ハワイでは少なくとも19世紀末以降、アングロサクソン系白人>他の白人>東アジア系移民>東南アジア系移民>そして最後にポリネシア系先住民という人種の階層構造が、厳然と存続し

ているという。

ハワイは、このように多民族・多文化の社会であるが、このような状況を生みだした歴史的背景は、「南洋の楽園」というハワイのイメージとは裏腹に、実に悲惨なものであった。ハワイの先住民がはじめて白人と出会ったのは、1779年のキャプテン・クックの来訪だったが、その後、ハワイ先住民が体験した「近代」は、ヨーロッパから持ち込まれた病原菌による大量死——クックが来島したときの先住民人口は30万人と見積もられているが、19世紀半ばには約8万人まで減少した——と、伝統的な農漁法の解体、そして白人のクーデターによるハワイ王朝の倒壊とアメリカ合衆国への併合であった。また、アメリカ南北戦争によって南部からの砂糖の供給が困難になったことに目をつけた白人企業家たちが砂糖きびプランテーションを開始し、そのための安価な労働力としておもにアジアから大量の移民を集めたことで、ハワイの社会構造は一変した。

狭い土地に複数の異なる民族が移住したために、お互いの民族意識はいやでも高揚せざるをえなかつた。出身国において他民族への差別意識が存在していた場合は、その意識がさらに増幅された。たとえば、日本人移民の社会で厳しく差別されたことから、沖縄出身の移民は自らをジャバニーズではなくオキナワンと呼ぶことが多い。

民族意識は単に当該民族だけの問題ではなかった。特に、プランテーションの経営者たちは、移民労働者が団結することを恐れて民族間に賃金や仕事上の差別を設け、その結果、エスニックな背景の異なる移民同士の対立が煽動されたといわれている。このように、エスニック・アイデンティティの成立と維持には、第三者による意図的な操作が見え隠れする場合もある。

かかる差別的な構造に民族を固定させるのは、もっぱら身体的特徴である。たとえば、「肥えていて怠惰な先住民」というイメージは、遠く日本まで共有されているイメージではなかろうか。ここには、貧富の差によって生みだされた民族の生活スタイルが、あたかも生来のものと見なされてしまう因果関係の逆転現象が見出される（ホームレスになったから仕事を見つけにくいのに、

仕事を怠けるからホームレスになるのだという先入観のように)。

今日のハワイでは多様な人種的背景を有する人びと(すなわち、「ミックス」とか「ハバ」などと呼ばれる混血)が増えている——2000年現在、アメリカ全体で混血の割合は2.4%だが、ハワイでは21.4%にのぼる——が、そのような人種的背景を指すのに、エスニシティという言葉がよく使われている。エスニシティという概念は、生物学的な意味合いの強い人種に対して、文化的な意味を持たせて使用されることが多いが、少なくともハワイでこれらの概念が使われる文脈においては、人種(血)とエスニシティは強く結びつけて語られ、両者を厳密に区別することは困難である。

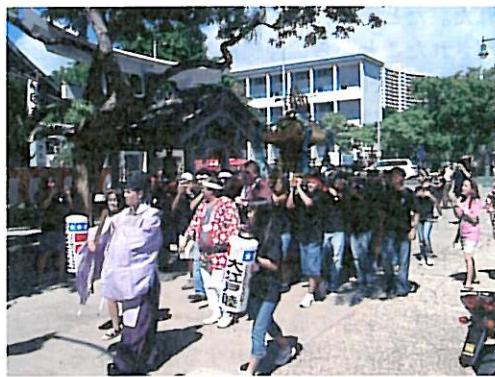
それでは、いかなる原理によってエスニシティが決められるのだろうか? アメリカでは10年ごとに大々的な国勢調査(センサス)が実施されるが、1970年以来、個人の帰属エスニシティは自己申告が基本となった。それ以前は、100年以上にわたって、ハワイにおけるミックスは、混血白人の場合はその人の白人以外の親のエスニシティに、非白人間のミックスの場合は父親のエスニシティに、ただし、わずかでもボリネシア系ハワイアンの血が流れる場合は例外なくハワイアンのエスニシティに分類されていた。すなわち、個人のエスニック・アイデンティテ

ィは、白人純血主義の思想や男性優位の原理によって客観的に決められていたのである。

ちなみに、今日のハワイで民族間の対立が深刻化しているわけでは必ずしもない。むしろ、私が出会ったハワイの人びと(特に10代や20代の若者たち)の間には、自分のエスニシティに対するアイデンティティを保持しつつも、自らを「ローカル」あるいは「カマaina」と見なす人たちがかなりいた。カマainaとは、ハワイ語で「土地の子」という意味である。この表現は、人種的・文化的には異なる背景を持ちながらも、ハワイという狭い閉ざされた世界のなかで、積極的に共存しようとする姿勢を内包している。

たとえば、一方で、日系人のイベントである「マツリ」や「ボンダンス」が日系人の枠を超えて、他方、ハワイの各地に残る先住民の聖地(ハイアウ)がハワイ先住民の枠を超えて、共に多くのハワイアンにとって自分たちの文化の一部であるとの認識が広がりつつある。ハワイの人びとの民族が融合していずれひとつに混ざり合うというのは理想的に過ぎよう。しかし、ハワイは別名「レインボー・ステイト」とも呼ばれるように、虹が多いところである。雨が降った直後に美しくかかる虹は、複数の民族が共存するからこそお互いの良さを發揮できる複合社会ハワイの将来を暗示していると信じたい。

(文学部教授)



ハワイ出雲大社のマツリ(オアフ島ホノルル)



ククイブカ・ハイアウ(マウイ島)

## 新研究員紹介



多賀 太

このたび、人権問題研究室研究員としてジェンダー研究班に参加させていただくことになりました。専門は、教育社会学、ジェンダー論です。文学部に所属し、「教育社会学」や「人権教育論」などの科目を担当しています。愛媛県で生まれ育ち、学生時代から本学に赴任する2008年まで福岡に住んでいました。

大学院生の時から、男性の立場でジェンダー問題を考える市民活動や社会活動に参加していました。市民団体との交流やイベント参加のため、関西方面にも何度も足を運びました。また、福岡県内の自治体で、男女共同参画関連の審議会委員やセンター運営委員などを務めながら、男女共同参画に関わる条例や行動計画の策定、男女平等教育や男性啓発のプログラム開発などにも携わってきました。

研究面では、主として「男らしさ」の形成に関する社会学的研究に取り組んできました。近代社会における「男らしさ」は、一方で、近代の理想的価値と結びつきながら、男性による女

性の支配を正当化し、女性を周辺的位置に追いやる機能を果たしてきました。他方でそれは、男性による女性の支配に寄与する偏狭な生き方へと男性を脅迫的に追い立てつつ、その基準に合わない男性たちを周辺化し貶めてきました。

「女らしさ」と同様に、この「男らしさ」も、永遠不变の規則ではなく、時代や社会的文脈に応じて変化しうるもののです。しかし、「男らしさ」の定義が変化したからといって、それが必ずしも女性の地位向上や、男性の生きづらさの解消につながるとは限りません。「男らしさ」の定義が変化しても、「支配者」に位置づく男性のタイプが変わるだけで、「あるタイプの男性が女性と他のタイプの男性を支配する」という不平等の構造自体は維持され続けるかもしれませんからです。こうした認識に基づいて、現在は、グローバリゼーションや市場化が急速に進行する今日の社会で、いかなるタイプの「男らしさ」が台頭しつつあるのかを明らかにすべく研究を行っています。

今後は、これらの取り組みを人権問題研究室での活動に活かしていくとともに、研究員の先生方から様々な人権問題についてご教示いただき、そうして得られたものを自らの研究に活かして参りたいと思います。  
(文学部教授)



広瀬 義徳

2009年度から人種・民族問題研究班に参加させていただくこととなりました。2008年4月に関西大学に着任し、

文学部の教育学専修で、教職科目の「教育制度論」や「教育実習」「総合演習」を、専門科目として「教育行政論」や「教育法」などを担当しております。専門研究領域は、教育制度学・教育行政学です。具体的には、公教育の現代的な変容の中で、日本の学校における外国籍／エスニック・マイノリティの子どもや教師にとってその権利保障はいかにして可能となるのか、法の言説理論・脱構築論や多文化主義の権利論、ラディカル・デモクラシーといった新しい研究潮流に学びながら考えています。それは裏返して言えば、日本という国民国家における公教育制度が、人間を個人化するとともに国民化する装置として政治的・文化的・イデオロギー的に機能してきた問題点を明るみに出し、

その構造転換の可能性を理論的・現実的に探るという試みです。

例えば、2006年に改正された教育基本法に続き、憲法の改正が議論されていますが、もし教育基本法や憲法が普遍性を語るなら、そこにおける法・権利へ可能的には内在しながらも、現実にはそこから排除されてきた他者（非・国民）に脱構築的正義の立ち位置を見出し、その立場から法・権利を再定義していく必要があるのではないかと考えます。日本では、なぜ外国籍だと教諭から排除されるのだろう？なぜエスニック・マイノリティの子どもは日本化（日本語・日本文化習得）を支援されても、自己のエスニシティは否認されるのだろう？それら排除や否認に直面した他者からの問い合わせに対する応答責任を引き受ける形で、法・権利の普遍性を文字通り徹底する方向に向け、法実践を開拓するのです。法・権利の普遍化は、現行法制にすでに普遍性が実体化されているとするような立場からではなく、排除された他者の包摂・救済を条件としてしか進まない、その意味で来るべきものではないかと思うのです。  
(文学部准教授)

## 新研究員紹介

上田 誉志美  
(文学部教授)

人権問題研究室の部落問題班の新研究員として参加された上田誉志美教授の横顔を本人の申し出により紹介する。

氏は1967年本学哲学科を卒業し、72年同大学院博士課程（哲学専攻）単位取得。70年より府立高校に着任。86年本学に赴任、「部落解放論」や「文学Ⅰ」を兼任し、91年教授昇任される。

83年以来文科省検定、高校「政治経済」を執筆し、現在に至っているが、教職課程「公民科教育法」・「総合演習」を兼任されている。2000年の学部改革に伴い文学部総合人文学科、インターディバートメント・エリアスタディーズ（日亞コース）に配属され、「情報社会と倫理」等

をも預かり、旧カリキュラム「総合コース」「風景論」を、「全学共通教育」の改革後も「知の跳躍」の一環として、コーディネートされ、共著『風景の成立』（1997年、海風社）を本学講師・山本教彦氏とともに執筆（05年学位取得）されてもいる。2009年より「地域研究」を発展的設置された「アジア文化」専修に参加されることになった。

学外では2001年以来、「エルエスエイチ・アジア奨学会（李秀賢顕彰奨学会）」の審査員を務め、毎年チャリティコンサートとして、「命と音」（機関紙『Chikyuujin』<http://www.chikyuujin.jp>）を主宰されている。

また、再建に尽力されてきた内閣府の社会福祉法人「全国視覚障害者文化振興協会（JBS福祉放送）」の理事長退任後、現在顧問の任を務められている。  
吉田徳夫（法学部教授）

## 2009年度人権問題研究室公開講座

回	開催日	テーマ	講師	会場・時間
58	6月26日(金)	多文化共存の時代へ向けて -〈英語化〉に対する欧州連合(EU)の言語教育政策-	杉谷 真佐子 (外国语部教授)	
57	9月25日(金) (5月22日の予定変更)	かくして水平社は生まれた -西光万吉の宗教的実存と表現主義-	宮橋 國臣 (委嘱研究員)	尚文館マルチメディア AV大教室
59	10月23日(金)	障害者雇用に取り組む企業のHRM	伊藤 健市 (商学部教授)	午後1時～午後2時30分
60	11月27日(金)	2008年関西大学学生の意識調査 からみたジェンダー（仮題）	守 如子 (社会学部専任講師)	

### 編集後記

今号の室報は人種民族関連の二つの報告が掲載された。歴史を振り返ってみると、17世紀にオランダ人が開墾のため中国本土から労働者を入植させるまでは、台湾はもっぱらボリネシア系の先住民の土地であった。ハワイと台湾は距離的にも隔たれており、現在の政治体制や文化の状況も大きく異なってはいるが、つい400年近く前まではともに同じ系統の先住民の世界であったことを思うと、たいへん興味深い。コロンブスがアメリカを「発見」したというような、支配者の歴史ではなく、世界の先住民たちがいかに侵略され、略奪され、搾取されたかという

観点から世界史を書き直すべきだという思いを新たにした。

今年度から新たに3名の専任教員が研究員として参加されることになった。研究室の活動が一層活発となることが期待される。（宇佐美 幸彦）

関西大学人権問題研究室室報 第43号  
2009年7月10日発行  
発行／関西大学人権問題研究室  
〒564-8680 吹田市山手町3丁目3番35号  
電話(06)6368-1182  
FAX(06)6368-0081  
<http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>